

劉宋の羊希占山法解釈に対する一つの試み

山崎俊銳

一

六朝期江南の大土地所有が、山澤封固という名のもとに進行したことは広く知られるところである。従来より、当時の土地問題を究明せんとする諸先学の論考も、何等かのかたちで山澤封固に言及されており、避けて通ることのできない問題となっている。

この山澤封固に対し比較的纏った史料を提供してくれるのが、『宋書』卷五四羊玄保伝にみえる、羊希の制定した五条よりなる占山法である。

さて、この占山法については、国家の山澤政策の一大転換とみなされてきた。その一大転換とは即ち、山澤の私的占有が法的に認められたということであり、諸先学の見解も一致をみる。しかしながら、この法の意義及び法の恩恵を被った対象となると、意見は大きくいつて二つに別れてしまう。ここでその要点のみをあげれば、何れも当時の官僚・豪族等有力者による山澤の広大な占有を認めた上で、一つは、国家の讓歩・支配権からの後退とみ、今一つは、

實簿登録を通して国家の支配権を確認し、更には下層農民をも保護することを目的としたとする二説である。^①

ところで、双方とも同じ前提に立ちながら、何故にこのような見解の相違を生んだのであろうか。それはそのまま六朝江南の国家権力に対する評価、執え方の相違といえるであらう。

以下、本論文で私は羊希の占山法に出来るだけ詳細な解釈を加えようとするものであるが、その際、先ず自身の六朝国家観を示したうえで、占山法に言い及ぶのが本来であらう。しかし未だそのような力量を持ち合わせてもいないので、ここでは先学諸氏の論考を踏まえながら、占山法解釈を最終の目標とし、六朝国家理解の第一歩にしたいと思うのである。

二

さて羊希の占山法解釈に至る途は、幾つか考えられるが、彼の人となり注目することも一手段となり得るであらう。何故なら羊希は、劉宋期世祖孝武帝に仕えた側近であったからである。『宋書』卷九四恩倖伝に

世祖親覽朝政。不任大臣。而腹心耳目。不得無所委寄。

とあり、元来、孝武帝は、その出身が軍閥で東晋とは王朝の性格を異にする劉宋の中でも特に側近政治的傾向を強め、寒人を重用した天子であったから、羊希の人となりをみることで、彼の占山法制定の意図を読み取れる可能性も、強ち無いとは断言できまい。

羊希については、占山法をも含めて卷五四羊玄保伝中にその記載がある。^②そこには彼が大明初に尚書左丞に任ぜら

れたとある外に、以下のような記述もみえている。

益州刺史劉璃。先為右衛將軍。与府司馬何季穆共事不平。季穆為尚書令建平王宏所親待。屢毀璃於宏。会璃出為益州。奪士人妻為妾。宏使羊希彈之。璃坐免官。璃恨希切齒。有門生謝元伯往来希間。璃令訪訊被免之由。希曰。此奏非我意。璃即曰到宏門奉牋陳謝。云聞之羊希。希坐漏泄免官。

さて、ここで羊希は如何なる役割を演じているのであろう。恐らく、何季穆の企みを知つて加担したに違いない。尚書令建平王宏の信頼厚い季穆の頼みでは、聞き入れない訳にはいかなかった。しかし、同時に煩わしく思ったことも事実であらう。そうであればこそ謝元伯に、「実は私の意志でやったことではない」と漏らし、これだけでは漏泄の罪で免官されたりはすまいから、続けて「事の次第は斯く斯く然然」と詳細に喋つたのであろう。

更に、次の記述も検討してみよう。

希初請女夫鎮北中兵參軍蕭惠徽為長史。帶南海太守。太宗不許。又請為東莞太守。希既到鎮。長史南海太守陸法真喪官。希又請惠徽補任。詔曰。希卑門寒士。累世無聞。輕薄多讎。備彰歷職。徒以青刻一介。擢授嶺南。千上逞欲。求訴不已。可降号横野將軍。

羊希もまた、宮中の密室政治に参画した天子側近の一人であつた。寒門出身の羊希は、欲の皮も相当つっぱつていたらしい。天子の私的寵恩のみに頼り、その地位を保持していた彼にしてみれば、自らの地位を確固たるものにするため、太宗明帝に身内の出世をしつこく要求したのも不思議ではない。

ところで川勝義雄氏は、劉宋・斉の中央政界が貴族対皇帝＝恩倖の闘争の場と化してゆくこと、そしてその傾向が顕著になり、恩倖の権力が政界に大きな力を持ち始める時期が孝武帝以後であることを示された。⁽³⁾ 羊希は、政界のト

ツブクラスに位置にするほどの寒人ではなかったけれども、占山法が孝武帝によつて採用された事実、又受け入れてはもらえなかったものの身内の出世を執拗に請願した点等を勘案するならば、二・三流処の恩倖として中央政界に一定の地位を得ていたであろうし、そうであれば彼の提起した占山法も、その周辺をも含めた恩倖¹¹寒人の利益を考慮に入れ、又、その立場を反映させたものではあるまいか。加えて、孝武帝・前廢帝・明帝の三代に仕え、この時期の中央政界を泳ぎ切ったということは、取りも直さず、処生術に長けていたからである。これは、何季穆の事件の際にも正体を現したところであり、羊希が三流であつたが故に採つた身の処し方であつたかも知れない。すれば、占山法にも究極的には自身の立場・利益を代弁させていたであろう。但し、それは飽くまで皇帝・恩倖の反感を買わない、目を付けられない程度においてであつたろう。

とはいえ、占山法の提起は、何も自分の利欲を実現させることが直接の原因・契機であつたはずはない。直接の契機は、何処か別の処にあつて、羊希はそれに相乗りしたのであるから。

次章においては、その直接の契機に眼を向けることにしたい。

三

前章の課題を達成するには、先ず、占山法提出の時期とその周辺に発生した事どもをみる必要がある。

羊玄保伝には、羊希の占山法提出に至る経過が以下の順で記述されている。(1)揚州刺史西陽王子尚の上言↓(2)有司による壬辰詔書の檢↓(3)羊希占山法の提起。揚州刺史西陽王子尚とは、孝武帝の第二子、予章王子尚のことであり、

この上言は、子尚が揚州刺史西陽王であつたときのものであるから、卷六孝武帝本紀より、その年代を確認し得る。以下に列举すれば、

- (a) (孝建三年春正月戊戌) 立二皇子子尚為西陽王。
 - (b) (同三年七月丙子) 以南兖州刺史西陽王子尚為揚州刺史。
 - (c) (大明二年十一月壬子) 揚州刺史西陽王子尚加撫軍將軍。
 - (d) (同三年二月) 撫軍將軍揚州刺史西陽王子尚徙為揚州刺史。
- 但、占山法は、羊玄保伝に

大明初。(羊希) 為尚書左丞。時揚州刺史西陽王子尚上言。

とあるのに續けて提起されているから、このことを勘案するならば、占山法制定にいたる一連の事は、恐らく、大明元年(四五七)から二年(四五八)にかけてのこと、せいぜい大明三年(四五九)頃までのことであつたかと思われる。^①

そうして、卷八〇孝武十四王伝において、

- (e) (同五年夏四月癸巳) 改封西陽王子尚為予章王。

となる。尚(d)については、同じく孝武十四王伝に

(大明) 三年。分浙江西立王畿。以浙江東為揚州。命王子尚都督揚州江州之鄱陽晋建安三郡諸軍事揚州刺史。將軍如故。

とあることから、名称上は撫軍將軍揚州刺史西陽王に変わりはない。揚州の内容が代わつただけのことである。又、

予章王子尚。字孝師。孝武帝第二子也。孝建三年。年六歲封西陽王。

とあつて、孝建三年（四五六）に六歳であつたことから、年齢僅かに七・八歳のときの上言であることも判明する。

子尚の上言は、やはり羊玄保伝にみえるが、

山湖之禁。雖有旧科。民俗相因。替而不奉。熾山封水。保為家利。自分頃以來。頽弛日甚。富強者兼嶺而占。貧弱者薪蘇無託。至漁採之地。亦又如茲。斯実害治之深弊。為政所宜去絶。損益旧条。更申恒制。

というのは、七・八歳にしてはあまりに立派すぎる感がしないではない。

それはさておき、子尚については更に、孝武十四王伝に

初孝建中。世祖以子尚太子母弟。上甚留心。後新安王子鸞以母幸見愛。子尚之寵稍衰。既長。人才凡劣。凶惡有
廢帝之風。

とあり、孝建中より孝武帝の寵愛を受けていたことがわかる。但、それは新安王子鸞にその寵愛が移るまでの期間ではあつたが。子鸞は、大明四年に新安王に封ぜられているので、孝武帝の子尚に対する寵愛は、恐らく、大明三年頃までは続いていたのであらう。ところが子尚は、成長するにつれ凡庸、且つ凶暴さを現わし始めたらしい。

次に、非常に注目すべき一文を掲げておこう。卷八二沈懷文伝に

子尚諸王子皆置邸舍。遂什一之利。為患偏天下。

とあるのがそれであり、記事の配列順次からみて、これは大明四年のことかと思われる。とすれば、子尚十歳のときには右のような行状でありながら七・八歳當時には全く清廉で、正直に山澤封固の弊を上言したとはとても考えられない。仮に、その上言が子尚自身のもので、時勢をいい当てていようと、恐らく、誰か後見人の作文であり、それ

も羊希と親しい間柄にあるもので、孝武帝の子尚に対する寵愛を利用して、子尚、羊希とともに孝武帝の前で一芝居うった可能性さえ無きにしもあらずであろう。

以上は占山法提起の時期と、それを提起せしめた西陽王子尚に関わるところ些かの問題点である。それでは、子尚の寵愛を利用した羊希にとって占山法を提起するチャンスは、一体何だったのだろうか。以下に考えてゆきたい。

孝武帝期の政策の特徴として掲げられるのは、寒人を用いた側近政治はもちろんであるが、外政すなわち対北魏政策に関していえば、一貫した積極策を採ったという点にあらう。文帝の元嘉晩年、二十七年・二十九年（四五〇・四五二）に二度にわたる北伐が強行され、何れも敗戦の憂目をみたことは周知の事実である。その後一旦北帰した北魏は、孝武帝が即位すると劉宋との貿易を求めてきた。それに際し、中央の意見は真二つに分れ、軍人達はあくまで対北魏強硬策を主張した。卷九五索虜伝には、

世祖即位。索虜求互市。江夏王義恭・竟陵王誕・建平王宏・何尚之・何偃以為宜許。柳元景・王玄謨・顔竣・謝莊・檀和之・褚湛之以為不宜許。時遂通之。

とみえ、どうやら強硬派が勝利をおさめたようであるが、前年⁽⁶⁾、碣磬まで攻め上り⁽⁷⁾、敗北して南帰した玄謨にしてみれば、軍人の面子にかけても強硬論を引つ込める訳にはいかなかったのであらう⁽⁸⁾。但、面子はともあれ、財政的にもまだ余裕があったから、押し通せたともいえよう。

今しばらく、孝武帝期の対北魏策を追ってみることとする。卷九四恩倖伝徐爰条に、孝武帝と徐爰の対北魏防衛問答があり、孝建三年、北魏が国境を侵した際に、国防問題を群臣に尋ねたのに対して、徐爰が回答したものである⁽⁹⁾。ここに全文を掲げることはいないが、就中、

詔旨。若令辺地歳驚。公私失業。經費困於徭輸。遠円決無遂事。寢弊賛略。逆応有方。

とあり、又、

詔旨。賊之所向。本無前謀。兵之所進。亦無定所。比歳戎戍。倉庫多虚。先事聚衆。則消費糧粟。敵至倉卒。又無以相応。

とあるのは、度重なる出兵と、それに伴う軍事費の不足に対する孝武帝の懸念を表明したものであろう。そして、後者の詔旨についての徐爰の回答は、

臣以為推鋒前討。大須資力。拋本応末。不俟多衆。今寇無傾国家突。列城勢足脅齒。養卒得勇。所任得才。臨事而懼。応機無失。豈煩空聚兵衆。以待未然。

とあるが、これは元嘉二十七年の北伐失敗を顧慮して答えたものであろう。すなわち、元嘉二十七年、北伐に際して一定の有資格者を除いた南兗州の三五門層の民丁を雇つて従軍させ、又、全国に弓の射手を募るに当たつては厚賞を加えて雇つたのであるが、所詮は烏合の衆、なかには金儲けよろしく募兵に応じたものもあろうし、これでは士氣が上るはずもなく、敗戦も当然の結果といえよう。この点徐爰は、元嘉二十七年の戦争では北魏も同様に国力を消耗しているようから、暫くは南進してくることはないであろう。そこで今の内に精兵を養い、次回の対北魏戦は人海戦術に頼るなといっているのである。

又、「推鋒前討。大須資力。拋本応末。不俟多衆。」とは、こちらも前の戦争で倉庫は空っぽであるが、そこは資金を掻き集め、これを使駄使用することなく、養つた精兵を以て先手必勝を狙えというのであろう。

さて、その資金の掻き集め方であるが、巻九四索虜伝にある元嘉二十七年の北伐の際の軍資金調達としては、

王公妃主及朝士牧守。各獻金帛等物。以助国用。下及富室小民。亦有獻私財至数十万者。

とみえ、王公以下、恐らく農民にいたるまでの献上物及び献金で賄おうとしたのであろう。が、それでも賄い切れなかったらしく、百官の俸禄の三分の一をカットして軍費に供出させたり、又、同じく索虜伝には、

軍用不充。揚・南徐・兗・江四州富有之民。家資滿五十万。僧尼滿二十万者。並四分換一。過此率計。事息即還。

とあつて、資産五〇万以上の富室と二〇万以上の僧尼から、それぞれ資産の四分の一の率計算で借金する旨を、有司が上奏している。この借金案が実行されたか否かは別として、恐らく徐爰は、これ等の資金調達法を今一度行うことを前提としたのであろう。

元嘉二十七年の北伐は、まさに官民あげての総力戦だった訳であるが、この北伐は大敗を喫したから、仮に有司の借金案が実施されていたとしても、富民側の貸し倒れに終つたに相違ない、加えて、元嘉二十九年にも再び敗戦しているから、資金供給者の意気も鎖沈し、徐爰の「大いに資力を須」める案も資金調達面からは必須であつたとはいへ、実行は難しかったろうが、それでも何とか調達せねばならなかつたのが、現状であつたろう。

以上のことから、孝武帝は元嘉の北伐大敗による大借金を抱えたまま即位し、尚且つ、北魏征討を継続していかなばならないことが明らかとなつた。

ところで、資金供給の源となつた「富室小民」について唐長孺氏は、商人を含んだ寒人地主であるとされ¹³。傾聴すべき意見であると思う。又、宮川尚志は、南朝の寒人を「理財に長じた三呉出身の富豪」とされ、川勝義雄氏も、寒人の全てが富豪であるとはいえないものの、恩倖の中に商人出身者や、商人と関係をもつものが多かつたこと

を述べられているが、元嘉北伐の際の資金調達¹⁵が、商人に負うたところもあり、加えて、王玄謨等の強硬論に伴う一層の資金の供給を、更に商人から提供に負わねばならなかったとするならば、孝武帝期の寒人の中央政界進出は、借金相殺的側面をもつものであったと思われ、又、寒人が確固たる地位を築いていったのも、その後の戦争資金調達と無関係ではなかったであろう。無論、このような商業資本の活用は一つの手段であつて、他にも種々の改革が実施されたことは、既に知られているところである¹⁶。

一方、当時は皇帝権力の増大を図るとともに、内廷の財政を充実させるべく、各地に台伝が設置され、そこに中央から台使を派遣して、山澤の物資を利用した営利活動、民間との物資交易を行っていた¹⁷。孝武帝は、この台使派遣により、賦税の速やかな徴収を企図し、又、台使の任には、多く寒人が當っていたから、彼等は通常の任務の外に、自ら暴利をむさぼつて、地方を圧迫したことがみえている¹⁸。

ともあれ、孝武帝の即位を機に、皇帝権の強化に伴う帝室財政の増加と、元嘉の北伐の負の遺産を解消すべく、国家財政の立て直しが焦眉の急であつた。孝武帝の治世はまさに以上のような財政転換期なのである。そして、羊希は、この時期に尚書左丞を拝し、占山法を提起した。加えて、孝武帝がこれに賛同した事実は、何よりも法の主旨が孝武帝の意志に沿うもの、すなわち、北伐による国家財政疲弊を回復しようとする政策の一端を担うものであつたはずである。そして、羊希は、急速な国家財政立て直しに乗じて、自らの利益を求め始めたのであろう。

以下、次章では今までみてきたところ、すなわち、占山法の両側面（一つは羊希自身の利益追求、一つは国家財政の立て直しと更なる軍事實費の調達）を考慮に入れつつ、稍々占山法を解釈してみたい。

四

〈前文〉

希以。壬辰乃制。其禁嚴刻。事既難遵。理与時弛。而占山封水。漸染復滋。更相因仍。便成先業。一朝頓去。易致嗟怨。今更刊革。立制五条。

この文自体、特に疑問点を有する箇所はない。但、「一朝に頓去すれば、嗟怨を致し易」と、既得權益者への配慮が伺われる点、以下の条文解釈に先立つて留意しておく必要がある。

〈第一条〉

凡是山澤。先常煥爐種養竹木雜果為林苑。及陂湖江海魚梁鰲場。常加功修作者。聽不追奪。

この条では、先ず山澤の内容が問題とされている。羊希がここで取り上げる山澤とは、切り開いて竹木雜果を植えたり、陂湖江海に魚梁を掛けたり養漁の場としているところに限られる。しかし、本来山澤とは更に広い範囲を含むものであつて、『晋書』卷二四職官志には

名山大澤不以封。監鉄金銀銅錫。始平之竹園別都。宮室園園。皆不属国。

とあつて、名山・大澤を始めとして、監池・鉞山もまた山澤の内なのである。けれど、羊希が対象としたのは飽くまで農林漁業の場であつて、名山・大澤等は除外されており、加えて、農林漁業の場と化した山澤の内、常にそれ等を維持管理して生産を上げているか、それとも放置して荒廃させているかを問題としているのみである。

ならば、何故羊希は『晋書』職官志にある名山・大澤・鉞山等を除外したのであらうか。それはすなわち、本来君主の私産として位置付けられる部分を切り捨てたことであらう。重近啓樹氏によれば、秦漢期の山澤には二つの系統があつて、その一つは君主の私産として、中央の直属官により管理・経営・徴税されるものであつた。今一つは、それと区別され、民の自由な用益が許される開放的な山澤、今後者を氏に習つて一般山澤と呼んでおこう。⁽¹⁹⁾

さて、重近氏の述べられたように、山澤が秦漢以来二元的發展を遂げたならば、君主の私産としてのそれは、劉宋孝武期に至つて台伝の管轄下に入つたはずであり、たとえ封固されていようと、羊希にとつては管轄の外にあつて、わざわざ言及する必要もなかつたのであらう。⁽²⁰⁾ 羊希の言及すべきは一般山澤のみでよい訳である。

結局、本条で追奪の対象となるのは、放置山澤だけであり、たとえば、一般山澤を封固している者にとつても、放置している以上はあまり美地ではなからうから、仮に追奪されたところで、痛手を被るようなかつたはずである。今一つの追奪対象として、無主の土地に帰した没落莊園の存在が考えられる。

『太平御覽』卷九六二竹部一竹上に『述征記』を引いて、

仙陽県城東北二十里。有中散大夫嵇康宅。今悉溜田墟。而父老猶種竹木。

とあり、又、嵇康の宅については、『晋書』卷四九に

宅中有一柳樹甚茂。乃激水園之。

とみえる。宅とは、渡辺信一郎氏によれば、耕地との結合を通じ、山林藪澤地等の公有原則を切り崩し、私的土地占有を拡大してゆく基点であつた。⁽²¹⁾ 竹林の七賢に数えられた嵇康が如何程の大土地所有を実現していたかはさておき、『述征記』の記載から、彼の宅にも耕地が附随していたことは明らかである。そして彼の宅にも、司馬昭によつて彼

が死刑に処せられた後、荒地に帰したのであろう。このように莊園として經營されていながら、莊園主が死刑等に処せられ、それが無主の土地になった際には追奪されることになる。²² 何れにせよ、本条は、有力者の既得權益を犯すことなく、未開か放置された山澤、無主の土地に帰した没落莊園等を、一旦収官するということであらう。

〈第二条〉

官品第一・第二聽占山三頃。第三・第四品二頃五十畝。第五・六品二頃。第七・第八品一頃五十畝。第九品及百姓一頃。皆依定格。条上貲薄。

〈第三条〉

若先已占山。不得更占。先占闕少。依限占定。

ここでは、便宜上、二条と三条を併せ考える。本条における「占」の字義を、「排他的占有を制限する」とのみ考えた場合は、あまりに大土地所有の現状と懸け離れていて、条文自体が空文化してしまうであらう。有効な解釈となるのは、越智重明氏の説、すなわち、孝武帝の税制改革の一端を担う貲産税の一つとみることである。²³ 当時、北伐による財政疲弊を解消するのは急務であること、直前にみた通りであれば、土地の占有を認める代りに何等の見返りを要したはずであるから。

但し、占有を認めるといっても、それは第一条との関りからして、収官した土地を再度割り当てるということではなからうか。

これを實際に土地を配分し、貲薄に登録するという面からみれば、恐らく官品の高い、割り当てをうける必要の無いものは、第三条により既得權益の中に繰り込んで、所有する全ての土地の中から官品相当分のみを貲簿に登録した

のであろう。そこで實際土地再分配の恩恵を被つたのは、占山額未充足者、恐らく貧下農民層ということになるが、それを以て小農民保護とするのは性急であつて、何故なら彼等は、一頃に充足されれば、一頃全てを登録されることになるからである。

一体、官品を基準にして第一品以下二品毎に一括りにし、上から下へ五十畝ずつ減少させて質簿登録するというのは、官品を以て、それを機械的に質産に換算するということであつて、下にいく程現実の土地所有額と近くなり、上になる程懸け離れるであらう。羊希は一品から百姓までの数値を設定する際には、先ず百姓一頃を設定し、九品と括つた後に、二品毎に五十畝を加えた結果、一・二品が三頃となつたということではあるまいか。²⁴これは、上に軽く下に重い課税ということになる。

私は、第二章において羊希の処世術をみ、占山法の制定にも皇帝、恩倖の意志を反映させたであろうことを予想しておいた。そのことは本条に見事に表れている。

たとえば、当時の恩倖戴法興を例にとつてみれば、卷九四恩倖伝には大明二年のこととして、

法興転員外散騎侍郎。給事中。太子旅賁中郎將。太守如故。

とあり、官品は五品となつて占山二頃に換算されることになる。課税率がいくらかはわからないが、仮に元嘉二七年の北伐の際の課税率、すなわち質産の四分の一とし、占山一頃を質産一万錢とみなした場合、五千錢が徴収されることとなる。²⁵

ところが、同伝には、又、

而法興・明宝大通人事。多納貨賄。凡所薦達。言無不行。天下輻湊。門外成市。家産並累千金。

とあつて、「累千金」が具体的に如何程になるかわからないが、元嘉二七年の記事のように、貨産五〇万を全て把握された上で、四分の一を徴収されるよりは、随分軽減されたはずである。

逆に、貧下農層は、土地一頃を充足されはするものの、同時に、貨産一万錢に換算され、二千五百錢が徴収されることになって、相対的にみれば非常な重税となるに相違ない。²⁶

第三章でみた通り、孝武帝の治世が一貫して対北魏強政策を執り、「大いに資力」を求める必要がある以上、この方策は官民総同員で対北魏戦争を後援するという意味合いをもち、孝武帝が反対するはずもなかったであろう。

又、羊希にしても大明初に尚書左丞に任官し、これから貨産を増やしていこうとするときに、六品官として二頃分を見做貨産とされたほうが、都合が良かったに違いない。

〈第四条〉

若非前条旧業。一不得禁。

「前条の旧業」とは、第一条の「種養竹木雜果為林苑。及陂湖江海魚梁鰓鰒。」に相違ない。ところで、この「非前条旧業」とは「第一条の農林漁業ではない農林漁業」ということになるであろう。それは、思い浮かぶところ農田耕作より無さそうである。すれば本条は、「占山を認められた土地で、果樹園を造っても養漁地を造ってもよいし、耕地に転化してもよろしい。」ということ、第一条取官され、第二条で分配される土地が未開山澤や没落莊園であったから、土地状態が異なり、一率に一つの産業に固定するより、選択枝を増やしておく方が、全体として生産性が高まるからであろう。その意味では本条は、未開地乃至は荒地の開発奨励ということになるかと思う。

〈第五条〉

有犯者。水土一尺以上。並計贓。依常盜律論。停除咸康二年壬辰科。

本条は、納稅義務を怠つた場合に課すべき罰則規定である。

五

六朝史を大きな流れでみた場合、それは、皇帝權力の対立の構図の内に推移する。但、そのような六朝期ではあつても、時代々々を徹視的に觀察してゆくならば、時として、それぞれが異なる様相を呈していることに気付く。無論、このことは、先学諸氏も熟知されるところであつて、たとえば、劉宋期は、貴族制社会の中にありながら、貴族が政治權力から浮き上がった時代、中でも孝武帝が寒人を多く登用し、側近政治を行つたこと等、先学によつて著された概説書や個別研究からも觀取できよう。本論も、その恩恵を被るところが大である。

ところで、当該時代の貴族階級の經濟的基礎となる大土地所有の發展について研究する際、從來採られてきた方法は、多く、六朝の各正史に散見する「山澤封固」の史料、又、それを禁止する史料を縦に連ね、その中で羊希の占山法が如何なる意味をもつか、というものであつたように思う。そうであれば、羊希の占山法は、六朝国家理解の大きな相違の中に吞み込まれ、時代の特殊性を以て現れる一制度としては、評価され難くなる。初めに、本来あるべき自身の国家觀を述べなかつたのは、確固とした国家觀を末だもつに至つていないという私の勉強不足もあるが、既存の国家論（六朝全体を通しての）に囚れる懸念があつたからである。

本論は、羊希により占山法の提起された時代、すなわち、劉宋孝武帝の治世の断面にスポットをあて、考察すると

いう方法を探ることにした。

羊希の占山法が元嘉北伐による財政疲弊の解消策である点、結果的には越智重明氏と同様の見解となった。但、第一条が未開山澤・没落莊園の收官であり、第二条は、その收官分の再分配であること、又、三頃から一頃という数字が、官品を機械的に換算し直した課税のための目安であろうこと等、新解釈も提示したつもりである。

ところで、今日、秦漢史の分野では重近啓樹氏や好並隆司氏により、新たな山澤論が構築されつつある。⁽²⁸⁾ ならば、今後これ等の成果を以て六朝の山澤を促え直すことが必須の課題となろう。本論は、その成果を生かすまでには至っていない。残された問題は多い。

注

- (1) 前者の立場を採るものとして、大川富士夫「東晋・南朝時代における山林叢沢の占有」(『立正史学』第二五号、一九六一年。後に『六朝江南の豪族社会』雄山閣、一九八七年所収)、唐長孺「南朝の屯・邸・別墅及山澤佔領」(『歴史研究』一九五四年第二期)があり、後者としては、堀敏一『均田制の研究』第八章第五節、岩波書店、一九七五年。及び關尾史郎「六朝期江南の社会」(『東アジア世界の再編と民衆意識』青木書店、一九八三年)が掲げられる。両者の違いは、前者が山澤を国有乃至天子専有と考えるのに対し、後者は、国家は山澤の管理・規制権を握るものとするのによる。
- (2) 以後、本文中の『宋書』からの引用は、巻数以下のみを記し、書名を省く。
- (3) 川勝義雄「侯景の乱と南朝の貨幣経済」(『東方学報』京都第三二冊、一九六二年。後に『六朝貴族制社会の研究』岩波書店、一九八二年、第三部第三章)。
- (4) 關尾氏は、前掲論文において、本法の制定を四五七(大明元)年直後、遅くとも四六〇(大明四)年の間とされている。その根拠は述べられていないが、これより外に年代確定の法がないので、同じ手段で年代を確定されたのであろう。
- (5) 卷八〇孝武十四王伝。
- (6) 元嘉二九年のことである。

(7) 今日の山東省東阿県の北。

(8) 卷九五索虜伝に元嘉二十九年のこととして、

玄謨攻碣磈。不克退還。

とある。

(9) 徐爰については、王鳴盛が『十七史商榷』卷六四「徐爰不當入恩倖伝」において、

徐爰本儒者。長於礼学。又修宋書。仕至顯位。攷其平生。敎歷内外。無大過惡。沈約乃入之恩巧傳。與阮佃天・寿寂之・季道児輩同列。此必沈約一人之私見。云々

と述べており、仮に徐爰の奏議に判断の誤りがあるとしても、私利私欲のためではなく、国益を考えてのことであつたとみてよからう。

(10) このことについては、越智重明「宋の孝武帝とその時代」(三上次男博士喜寿記念論文集) 歴史編、平凡社、一九八一年。後に『魏晋南朝の人と社会』研文出版、一九八五年所収) を参照されたい。

(11) 卷九五索虜伝

又募天下弩手。不問所從。若有馬步衆芸。武力之士庶科者。皆加厚賞。

(12) 卷五文帝本紀

索虜攻懸瓠城。行汝南郡事陳憲拒之。以軍興減百官俸三分之一。

(13) 唐長孺「南朝寒人的興起」(『魏晋南北朝史論叢』続編、生活・読書・新知三聯書店出版、一九五九年所収)。

(14) 宮川尚志「六朝史研究」政治・社会篇第五章、日本學術振興會、一九五六年。

(15) 川勝前掲論文。

(16) 越智前掲論文。

(17) 中村圭爾「台伝—南朝の財政機構—」(『中国史研究』八、一九八四年)。

(18) 『南齊書』卷四〇武十七王竟陵文宣王子良伝、及び『二十二史劄記』卷一二「齊梁台使之害」。

(19) 重近啓樹「中国古代の山川敷沢」(『駿台史学』第三八号、一九七五年)。

(20) 中村氏は前掲論文において、台使の「台」は御史台のそれであつて、尚書台に属するものではないとされる。

- (21) 渡辺信一郎『中国古代社会論』第四章、青木書店、一九八六年。
卷五四孔季恭伝には、

靈符家本豊。産業甚広。又於永興立墅。周回三十三里。水陸地二百六十五頃。含帶二山。又有果園九處。為有司所糾。詔原之。而靈符答不実。坐以免官。後復旧官。(中略)前廢帝景和中。犯忤近臣。為所讒構。遣鞭殺之。二子湛之・淵之於都賜死。

とみえるが、父とともに息子が死刑に連座させられれば、その莊園は後継者が無くなり、無主となるであろう。私は以上のような例を想定している。

- (23) 越智前掲論文。

- (24) 菊池英夫氏は、百姓に対する占山一頃について、氏の論考「南朝田制に関する一考察―唐田令体系との関連において―」(『山梨大学教育学部紀要』第四号、一九六九年)中で、「ここでの一頃は、西晋占田規定における百姓男女の占田額が計一頃であるの想起せしめ、凡そあらゆる場合に百姓の占地は一頃を標準とするという伝統的觀念によつて与えられた数字ではないかという気がする。」と述べられている。従いたい。

- (25) 元嘉二七年の際は、勝利を確信し、一度限りの借金として返還を予定していたであろうから、四分の一という高課税率であつたと思われる。対して羊希は、一応恒制たることを前提に占山法を考えたので、これ程高くなかつたであろうが、課税率が不明であるため、計算の便宜上四分の一とした。ともあれ、一品官から百姓まで金額差の小さいことが判明すればよい訳である。

- (26) 農民に対する徴税は、恐らく、相当額の穀物を以て徴せられたであろう。

- (27) たとえば、宮崎市定『大唐帝国―中国の中世―』中央公論社、一九八八年。及び川勝義雄「劉宋政權の成立と寒門武人―貴族制との関連において―」(『東方学報』京都、第三七冊、一九六四年。後に同氏前掲書第三部第一章)。

- (28) 重近前掲論文、及び好並隆司「中国古代山沢論の再検討」(佐藤博士還暦記念『中国水利史論集』、国書刊行会、一九八一年)。